東 邦 幼 稚 園 だ よ り　　11月号　№9

とうほうの風

～ やさしい心 丈夫なからだ みんな仲よく ひとりだち ～

令和7年（2025年）　11月4日　発行

“笑顔”あふれるハレの日

～ 園児をはじめ、ご家族でむかえられた「運動会」 ～

【園長：田川隆司】

前日の激しい雨でグラウンド状態が思わしくなく、早々に延期した「運動会」でしたが、実施当日は、好天に恵まれた素晴らしい日となりました。朝夕はすっかり秋の気配が漂い、冬を思わせる寒さすら感じるこの頃ですが、改めて「秋」という“感性”を育む季節感が激減し、ニュースで知らされる「秋のたより」的な話題で『そっかぁ～』と思うことすら少なくなってしまいました。まもなく冬の話題になり、次号がお手元に届くころには、『今年も寒いねぇ～』という言葉が交わされるのでしょうね。

さて、前号で“誰のための体育大会？”ということを話題にしました。そして、『子どもたちが運動に親しむこと、体力を向上させていくこと、そうした活動の日ごろの成果を出す場、“節目”であると考えます。さらに加えるとすれば、運動会をはじめ、行事の意義のひとつとして、子どもたちが他の子たちと協力して活動しながら、行事をつくっていく過程に学びがあります。ふだんの活動でもそうした協働的な学びは行っているのですが、やはり、保護者に見ていただける、とりわけ異年齢も交えて互いに見合う行事を通じた成長の機会は大きなものがあるでしょう。（そこへ「次は！」「来年は！」という「あこがれ」の感情が生まれると…👍。）

ご覧いただいたみなさん。いかがでしたでしょうか？　園児たちの恥ずかしながらもひたむきにがんばる姿やがんばったよ！とうれしそうに保護者を見つめる姿に“親として”感じることは沢山あったことでしょう。しかし、カメラやスマホを向けられているグラウンド内の子どもたちに、「保護者の笑顔」が見えているでしょうか。ひょっとしたら大きなレンズやスマホで隠れた顔しか見えていなかったりして…。撮影に両手を奪われては拍手もままならないですよね。“親育ち”はまだまだ始まったばかりですよ。写真や動画も素晴らしくなりましたが、互いの「心のアルバム」にも焼き付けてくださいね。

「ハレの日」の子どもたちのハツラツとした“笑顔”そして、周囲で見守られる保護者のステキな“笑顔”の数々…。「社会生活」の基礎である保育・教育の場で学ぶ「集団生活」の基礎と言えるのではないでしょうか。長年言い続けていることなのですが、互いにがんばっている姿をほめたたえる「拍手」は世界共通の文化です。かけがえのないこの時期の一コマを撮影して残すのもうれしいことですが、あの場所で多くの方から贈られる“拍手の渦”が彼らの心に残る財産となってほしいと願っています。

なお、早朝からの準備ならびに閉会後に、片づけでお手伝いいただいたボランティアの方々、急遽「これ、幼稚園まで持って行きますね！」等と多々お手伝いいただいたご家族の皆様にも感謝いたします。次年度も小学校をお借りできるよう、気持ちの良い会場運営ができればと考えております。

※販売写真やインスタグラムの一コマもご活用願います。

園長の【四方山話（よもやまばなし）】

【将来『社会人』になる子どもたちのために…】

運動会と同一日に行われていた「MLB（アメリカメジャーリーグ）」でのワールドシリーズ。ドジャースの大谷選手はもちろんのこと、山本由伸選手が MVP を獲る大活躍をして優勝しました。日本のプロ野球選手から MLB のトップクラスに上り詰める選手が出てくるなんて、私の子どもの頃には想像すらできませんでした。しかし、30年前に当時の近鉄バファローズから「野茂英雄」というピッチャーがドジャースに行きました。日本人二人目の彼の活躍は、MLB でも記録に残るものですが、当時は「日本人がメジャーで通用するわけがない！」という批判の嵐。今でこそ「イチロー」をはじめとするスーパースターが活躍する時代となりましたが、世界で活躍する日本のアスリートたちはどんどん“進化”していますね。

さて、プロ球団で活躍している選手で「育成選手」という言葉をお聞きかと思います。ある大学の先生からこんな話を聞いたことがあります。 スポーツ推薦で入学後、学生たちに課題としてある「感想」としての文章を書かせたところ、ひらがなだけの一行しかかけない学生がいたと…。さらに、阪神タイガースで掛布などを育てた、独身寮「虎風荘」の元名物寮長さんから仕事の飲み会で伺ったお話。「プロ野球選手の“平均寿命”は、たったの“9年…”。ということは、ほとんどの選手が5年以内に辞めざるを得ない。20代で突然、社会に放り出される者が辿る道はかなり悲惨だと…。その前に“社会人”として通用する人間に育てるのも寮長の仕事」と強く仰っていました。1軍でこそ最低年棒は1600万円（2024 年現在）ですが、契約金があるとはいえ、2軍選手の最低年俸は440万円、そして、先ほどの「育成選手」となると240万円。1軍登録や抹消、そしてベンチ入りがどれほど大きな事か推測できるでしょう。他のプロスポーチ選手が抱えるスポンサー問題を考えると追い求める夢とともに、さらに厳しい“現実”が待っている世界です。引退した後の人生の方が長いのがプロのアスリートなんですね。だからこそ、光り輝くスーパースターが“語る”言葉や仕草に、その「人となり」が垣間見られます。我々、就学前教育に携わる現場でも子どもたちの“将来”を見据えながら保護者とかかわっていこうと気持ちを新たにしています。